

目次

まえがき……………2

プロ ローグ 長谷川の「生徒指導」の定義 生徒指導は“錯覚”である

- 01 「生徒指導」を自分の言葉で定義しよう…………… 10
- 02 絵空事に惑わされることなく、本道の工夫と努力を重ねよう…………… 11
- 03 思春期にある生徒への指導ではいっそうの配慮と工夫を心がけよう…………… 14
- 04 たった一人の例外もなく、大切にしよう…………… 16
- 05 収穫には間に合わなくても、種を蒔き続けよう…………… 18
- 06 智・信・仁・勇・厳を身につけ、研ぎ澄まそう…………… 22
- 07 いついかなるときも率先垂範を徹底しよう…………… 25
- 08 生徒の心を開いてから、大切なことを伝えよう…………… 26
- 09 自己決定権を尊重しつつ、主導権は堅持しよう…………… 28

1 1年間で激変！ 「自分から変わろう」とした生徒の事実

- 1 物静かな女子 A さんが共鳴した、長谷川氏の言動…………… 30
- 2 リーダーはもうしないと云った B 君が再び人前に立ったきっかけ…………… 36
- 3 クラス 1 のやんちゃ男子 C 君が変わった出会いから別れまでの道筋…………… 42

2 「日常の生活指導」 における指導の極意

- 1 校則を守らない生徒への対応…………… 48
- 2 提出物がなかなか出せない生徒への対応…………… 52
- 3 当番活動に取り組まない生徒への対応…………… 56
- 4 友達にちょっかいを出す生徒への対応…………… 60
- 5 男女の仲をよくするための秘訣…………… 64

3 「授業」 における指導の極意

- 1 教科書や資料などを忘れた生徒への対応…………… 68
- 2 私語を繰り返す生徒への対応…………… 72
- 3 教師の指示や発問に反応しない生徒への対応…………… 76
- 4 発言・発表への抵抗感が強い子への対応…………… 80
- 5 授業で達成感を感じさせるためには…………… 84

4 「いじめ対応」 における指導の極意

- 1 いじめをどのように発見するか…………… 88
- 2 心無い言動が数多く飛び交う時…………… 92
- 3 持ち物がなくなったとき…………… 96
- 4 SNS を介したトラブルが発生した時…………… 100
- 5 「いじめられている方にも問題がある」という訴えにどう応えるか…………… 104

5 「不登校」 における指導の極意

- 1 前年度から不登校だった生徒への対応…………… 108
- 2 不登校になりそうな子への予防的アプローチ…………… 112
- 3 登校をしづらくなった生徒への対応…………… 116
- 4 別室ならば登校できる生徒との付き合い方…………… 120
- 5 関係機関を巻き込んでの具体的対応…………… 124

6 「部活動」 における指導の極意

- 1 集合時間に遅れてくる生徒への対応 128
- 2 道具の管理や手入れが雑な生徒への対応 132
- 3 やる気を感じられない生徒への対応 136
- 4 熱心だが不器用な生徒への対応 140
- 5 部としての一体感を生み出す秘訣 144

7 「保護者との関係」 における指導の極意

- 1 保護者との「共汗関係」を築くポイント 148
- 2 我が子との関係に悩む保護者への対応 152
- 3 学校への不平不満を伝える保護者への対応 156
- 4 学校に対して無関心な保護者を巻き込むためには 160
- 5 保護者が大応援団になる教師の特徴 164

8 学校を動かす 「生徒指導のシステム」づくり

- 1 自分一人で抱え込まないチームで行う生徒指導 168
- 2 まずい対応事例の対処 172
- 3 生徒指導委員会の運営 176

あとがき 180

執筆者一覧 182

本書を読まれる方への メッセージ

編著者プレゼンページ

本書の構成／長谷川博之

本書は次の四つのパートで構成されています。

- (1) 生徒指導の原理原則を知る
- (2) 若手実践者による長谷川実践の分析から学ぶ
- (3) 分析者の実践報告から応用の仕方を学ぶ
- (4) 分析及び追試実践に対する長谷川のコメントで深める

まずは(1)で指導の土台となる考え方と、その考え方を基に行った代表的な指導事例とをお示しします。

20年も現場の最前線で仕事をしていれば、膨大な指導事例が蓄積されるものです。中には書きたくとも書けない事例もたくさんあります。

インパクト大の事件であり、指導もドラマティックですから、読み物としては面白いのかもしれませんが、しかし、そのような事例は取り上げていません。理由の第一は、配慮です。第二は、多くの学校では起こり得ず、たとえ面白く読めたとしても、参考にならないだろうからです。

よって、書ける事例の中から学ぶに値する事実を選びました。

(2)(3)は、私の研究会に集う若手実践家たちの文章です。「分析」と言っても単なる感想の羅列であり、分析の域には程遠い文章もあります。追試実践にも、私の意図を履き違えているのではないかと思える内容があります。それでも教師歴5年、10年の実践家たちがしんどく考え、熱く実践している、その事実間違いはありません。

世に「あれども見えず」と言います。同じ事例を観察しても、実力によって見えるものが変わります。実力が高まれば、それまでには見えなかったものが見えてくるものなのです。

彼らはその修業の途上にいます。「学びのプロセス」のひとつとして、大きな心で受け止めてくだされば有難いです。

実践のポイントは(4)で明らかにしました。

本書が読者の皆様の生徒指導力向上の一助になれば幸いです。